信毎俳壇

今井　聖選

青嵐天竜川を遡上せり　（箕輪町）松沢　陸

天窓は明治元年天道虫　（飯山市）田中　琢雄

父の日やただ存在し去りし人　（大町市）丸山めぐみ

銅鏡に映りし人や姫女苑　（安曇野市）平　至行

踏む土は膚石は骨沖縄忌　（佐久市）真山　邦弘

故郷の青田を泳ぐ吾の魂　（坂城町）宮下　和夫

をみなごに前掛けかけて氷水　（長野市）田中　重実

まなこ四つ覗く縁側蚕籠　（佐久市）箕輪なつ江

金婚を経て梅漬の技得たり　（大町市）原田　勝

酒以外区切りの八十路夕端居　（長野市）坂口　智弘

佳作

手の甲に句をはしり書袋掛　（須坂市）富田　孝弘

「卒業」のラストは同じ半夏生　（佐久市）佐藤千栄子

選評　一句目、青嵐が遡上するという発想がダイナミック。天竜川という名称と相まって桁違いのスケールを感じさせる。二句目、天窓の上に明治元年の青空がみえる。近代が動き出す青空だ。三句目、自分にとってはかけがえのない父だが一般的には一人の普通の人間に過ぎない。生まれてそして死んだのだ。四句目、姫女苑を背景にして銅鏡の中に昔の人が映る。歴史を感じさせる幻想である。

神野　紗希選

コンビニの二階は塾や夏燕　（小海町）依田　久代

鈍色の匙太宰忌のポルシチへ　（松本市）伊藤　和夫

手に残る魚の匂栗の花　（佐久市）水間喜美子

石垣の反りに沿ひ淺蜀の花　（長野市）松本　宏要

暗記せよと教育勅語夏の夢　（伊那市）中村　茂子

塩揉みの赤紫蘇匂ふ雨の午間　（大町市）原田　勝

長梅雨や唐十郎の紅テント　（長野市）小林　明男

松蝉や幹太くして声細き　（飯田市）大石　昭重

代掻機ジャズと乗りくる乙女かな　（飯山市）田中　琢雄

きひきひと群るる蝙蝠カタコンベ　（小諸市）加藤　陽介

佳作

辰雄館書庫に二輪ばらの花　（佐久市）竹内　勝代

ろくがつのいんこのうんこみどりいろ　（中野市）風間　一乃

選評　一句目、現代の町の風景。健やかに育ち空を飛ぶ夏燕がコンビニも塾も肯定する。二句目、太宰治の小説「斜陽」は、お母さまがスウプを美しく飲む場面から始まった。鈍色の匙で掬えば、ポルシチの赤にも陰影が生まれる。三句目、魚も栗の花もそのにおいはぬれて生臭い。どこか共通する二物を並べ、生きる実感を刻んだ。四句目、石垣も灼けて暑かろう。即物的描写が季節の体感を再現する。

坊城　俊樹選

日の落ちて今日消されゆく夏の浜　（伊那市）中村　初治

誰の血ぞ平手打ちせし蚊の軀　（長野市）福沢　ナナ

てんたう虫草間彌生は大宇宙　（飯山市）田中　琢雄

紺碧の海の語らん沖縄忌　（松本市）辻　佳代

あぢさゐや長き手紙を書き終へし　（長野市）宮沢　信博

ひたむきに露地に身過ぎの夏暖簾　（宮田村）金本　牧子

風光る金管バンド揃ふ足　（愛知県大山市）紅紫あやめ

夏の夜や足の冷たさ感じたり　（中野市）増田きみ江

昼下り澄む水口に蝌蚪の群れ　（箕輪町）柴　和夫

畳まれて幾星霜や白絣　（南相木村）猿谷　秀

佳作

夏空や女子高生のカンツォーネ　（安曇野市）中山　一孝

五指をもてもぐや実梅と日輪と　（飯島町）横山　真弓

選評　一句目、何も浜そのものが消されるのではなかろう。夕日が落ちて今日の夏の浜というものは消える。いよいよ秋が。二句目、家族の集う晩餐。ふと止まっている蚊をたたくと誰かの血が付いた。お父さんかおばあちゃんか誰の血か。三句目、草間弥生は前衛の画家。その飛躍する抽象画は大宇宙そのもの。ここに居る天道虫の不思議な文様を見ているとその存在も彼女によって創造されたのかも。